

白山ふるさと文学賞

第三回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

小学生高学年小説の部 優秀賞

桜・友情をつなげ

東明小学校六年

笹川 ささかわ

虹架 ななか

「行つてきまーす。」

ユナは返事を待たずに、家を飛び出した。

二月も終わるころなのに相変わらず冷たい風がほおをさす。ハッハと白い息をはきながら、ユナはふんすいの前に立っている親友に声をかけた。

「おはよう！アユミ。」

アユミは、ふり返るとパツと花がさいたような笑顔になった。まるで、そこだけ春が来たみたいに。

ユナとアユミは今年で十一才だった。一年生になった日：親友になったあの日から、もう五年もたっているのだ。このふんすいも五年間、ずっと待ち合わせに使っていた。そこからユナたちの通う桜咲小学校へ向かっていた。

学校が見えてきた。校庭には、すごく大きな桜の木がある。ユナがそれを見つめていると、アユミが

「もうすぐ三月だね。桜、さくかな。」

と聞いてきた。でも、つぼみはかたく閉じていて、咲く気配は全くない。

「まだでしょ。さくどころか、丸裸だし。」

「そっかあ。そうだよね。」

アユミは大げさにため息をついた。ユナは思わず笑ってしまった。

その日の昼休み、同じクラスのサオが、アユミとそうじのこともめていた。サオがアユミにそうじ当番の仕事を押しつけようとしていたのだ。ユナがじつと見ているとサオが来てユナの耳にささやいた。

「アユミちゃんってガンコだよね。たかがそうじ当番ぐらいで、ケチすぎ。ねえ、ユナちゃん。」

それはうんと言わせるようないかただった。しかも、サオはクラスほぼ全員をとりまいていて、気の弱いユナには逆らえない相手だった。ユナはいきおいにおされて、うなずいてしまった。サオが満足そうに笑うと同時に、アユミがさげんだ。

「サオ、いいかげんにしてよ！」

サオはビクツとすくんだ。アユミはどなり続ける。

「やらないって言うてるでしょ！私の当番は来週だもん。それは、おしつだけよ！人の気持ちを考えてない。最低っ！」

アユミはあらい息をくり返していた。まっ赤な顔で、ポニーテールをゆらして、サオはあ然としている。そこへ、先生が入ってきた。クラスメイト達はぞろぞろと席についた。アユミはまだいかりがおさまらないのかまゆをつり上げていた。

アユミは五時間目が終わるとユナの所へ来た。

「ユナ、話があるからあとで桜の木の所へ来て。」

ユナは放課後、あの大きな桜の木へと向かった。アユミはユナに気付くと少し笑った。

「ねえ、聞きたいことって何？」

「…あのさあ。サオのことなんだけど。」

アユミはすごくいたくなさそうだった。

「あの…、ユナ…サオとなんか話してなかった？」

ユナは思い出した。アユミへの暴言に対してうなずいてしまったことを。

「あ…。」

「それで、教えてほしいんだ。何を、話してたか。」

ユナは言えなかった。大切な親友をうらぎってしまった。

「ねえ。おこらないから教…」

「うるさい！」

さげんでしまった。もう止まらなくなった。

「アユミには関係ないじゃん。あんなところでキレちゃってさ。バカじゃないのっ。」

アユミの顔がまっ青になるのが分かった。それを見たくなくてユナは家へにげ帰った。桜の木がただザワザワと音をたてるだけだった。

ユナが帰ると愛犬のサクラがむかえてくれた。サクラの頭をなでているとアユミのことを思い出した。

「桜、かぁ。」

——四月一日、ユナは桜咲小学校の一年生になった。

「美しき桃色の桜が今咲きほころぶ♪」

覚えた校歌を歌いながら新しいランドセルをせおった。お母さんに手を引いてもらって桜咲小学校へ向かった。しばらくして校庭が見えた。

「わぁ。大きな公園！ブランコもすべり台も鉄ぼうまであるよっ。それに…」

ユナは満開の桜に手をのばした。

「あーんなすごいさくら見たことないや！」

ユナは走って学校の中へと入る。そのあとをお母さんとお父さんがあたふたとおいかけていった。

「それでは、自己紹介から始めましょう。」

担任の先生が名前をよぶたびに「ハルカちゃんまたいっしょだね。」とか、「ユウキくん久しぶり。」などの声上がる。でも、ユナは同じ保育園から来た子が一人もいなかった。

「橋本 ユナさん。」

「はっはい。えっと好きな食べ物はいちごです。よろしくお願いします。」

ユナが言いおえると声は一言も出ず、パチパチとまはらなはく手がおくらただけだった。入学式がおわった後もユナだけ一人ぼっちだった。悲しかったけどふんばった。そして、楽しいことを考えた。

「あっ、そうだ。あの大きい公園に行こう。」

ユナが校庭に出ると一人の女の子がいた。同じ一年生だった。その子がクルリとユナの方を向いた。そしていきなり話しかけてきた。

「私ね、桜が好きなんだ。」

「え？」

「だからあ、桜が好きなんだって。あなたは？」

ユナは自分に桜が好きか、聞かれていることに気付いた。

「あっ、私も好き…。」

女の子は「だよねー。」と笑った。

「私の名前はアユミ。原川 アユミ、よろしくね！」

ユナはなんだか話しやすいなと思った。

「私、ユナ。こちらこそよろしく！」

するとアユミはニコツとした。

「じゃあユナ。私達がずっと親友でいれるようにこの桜にちかおうよ！」

ユナはポカンとした。

「私、ユナも桜も大好きだもん！」

ユナはほおが桜の色に変わった。

「分かった。約束！ちかう！アユミ。」

二人は顔を見合わせて笑った。これが二人の出会いだった——

「アユミ…。」

ユナは、部屋に入った。そして勉強づくえに置かれているしおりを手にとった。それは一年生の時にアユミと作った物で、中に桜の花びらが入っている。そのとなりに、ペンで「いちねんいちくみ はしもと ユナ」と書いてある。それを見ていると泣きたくなった。こらえようとしてもだめだった。ポトポトと桜の頭になみだが落ちる。

「バカなのは私だった。ゴメンなさい…アユミ。」

くやくしてサクラを思いっきりだきしめた。サクラは苦しそうにもがいたが、ユナはサクラをはなそうとはしなかった。

次の日、ユナは少しだけ期待してふんすいの所へ向かった。でも、やっぱりアユミは来ていなかった。分かっていたことだが、やはりショックだった。いつもは近く感じる学校が、すごく遠いように思えた。

教室のドアを開けると、まっ先に目に入ったのはアユミだった。ハル

キくんやメイコちゃんなどと楽しそうにしゃべっている。アユミがこつちを見た。その目はにらんでいるみたいで、ユナはあわてて目をそらした。後ろから笑い声が聞こえてくる。ユナはまた、なみだが出そうになつてトイレにげこんだ。「アユミ、なんで…どうしてあんな目でにらむの？なんで…」

トイレのまどからは校庭が見えた。桜がアユミのようにユナをにらんでいるみたいでこわくなってトイレをぬけだした。教室に近づくとハルキとメイコの声が聞こえた。

「なあアユミ。橋本と何かあったのか？」

「ユナちゃんとケンカしたとか…？」

ユナはドキリとした。なんといいのか、気になった。するとアユミはニコツとして

「別に。ユナのことは関係ないよ。だって…私は信じてるもん。」

最後の言葉はひとり言みたいに小さい声だったけどユナの心には大きくひびいた。「私は信じている」ユナはアユミと仲直りすることをかたくかった。

アユミはプライドが高いから、ただで許してくれないことは分かっていた。だから…、「桜」ユナはまだ咲かない桜の木を見つめた。

次の日、三月になった。この日も、ユナは一人で学校に向かった。校庭の桜はまだ咲かない。毎年、この時期になると満開のはずなのに。「どうしよう。」

ユナは不安になった。このまま咲かなかつたら、アユミと仲直りできないかもしれない。ユナは先生や友達にないしよで桜の木を育てることにした。学校へ一番早く来て水をあげたり、近くの雑草をぬいたり、木に登っていらぬ枝を切ったりもした。おかげで切り傷やあざがたえなかつたが、友達のためだと思えばかんだんだった。

三月中旬、努力のかいあってか、つぼみが芽生えた。ぶつくりと丸いつぼみが風にゆれていた。ユナはそれを見て手を合わせた。

「アユミと仲直りできますように。」

その次の日の朝、学校の校庭が見えてきたころ、きれいな桃色の束のような物が目に入った。

「えっ」

それはよく見るといくつもの花が重なっていた。ユナはまさかと思い、校庭へかけだした。

「桜が…、さいてる。」

ユナの目の前の桜の木は満開だった。いいぐあいにもれ日がさしこみ、その中であわいピンク色がラメのように…いや、ラメ以上にきらめいていた。それを見ていると時間をわすれた。美しいなんてものじゃなかつた。いつの間にか桜のまわりには人だかりができていた。ヒラツ、ユナの前がみに桜の花びらがついた。その花びらはすけたように美しかった。風がふくと春のやさしい香りがふわりと広がる。思わず笑みがこぼれた。ユナはその花びらをポケットにそつと入れると教室へ向かった。

そしてまた何日かたつた。卒業式の練習も始まって春休みも近くなつてきた。ユナは、桜の入つたしおりを手にとって、アユミに話しかけた。

「ねえアユミ」

アユミがふり返つた。アユミの目にユナのすがたが映る。まどの外では、桜が見守つてくれていた。

「アユミ、この前はごめんさい。あの桜の木の所で、悲しい思いをさせてしまつて…、本当にごめん！あの…しおりを作つたから、よかつたらもらつてね。」

ユナはしおりをさし出した。するとアユミは、いつの日かみたいになニコツと笑つた。桜はサー…と音をたてた。アユミはしおりをとつた。

「ごめん。ごめんね。アユミ。」

ユナはいつの間にか泣いていた。

「やだなあ。もう！本当に泣虫なんだから。」アユミはハンカチでユナのなみだをふいてくれた。そして、そのハンカチにも桜の花びらがふわり

とのつた。アユミはその花びらがのつたままハンカチを片づけて上をむいた。

ユナも上をむいた。

「ありがとう。桜。」

——それから二年がたつた。ユナはふんすいの所でアユミと合流し、そのまま学校へ向かった。すると、桜咲小学校の校庭の満開の桜が見えた。ユナとアユミはそこを通りすぎていった。セーラー服のリボンが風になびいた。新しいバックには、おそろいのしおりがついている。そのうらには「桜咲中学校 一年一組」とペンで書かれていた。桜は遠くなつてゆくユナとアユミをいつまでも見守っていた。

